【原著】

志願・入試・学務データに見られる入学者選抜方法の特徴

吉村　宰・木村拓也（長崎大学）

長崎大学の 2 学部における志願・入試・学務データを分析し，長崎大学における現行の入学者選抜方法にどのような特徴がみられるかを探った。具体的には，1 年次学業成績（GPA）の入試区分による比較，休・退学状況の実態と入試区分による比較，入学者の志願パターンの観察を行い，それぞれの入学者選抜方法に特徴的に見られることを指摘し，その理由を主として学習意欲の面から考察した。

1 はじめに

長崎大学アドミッションセンターではこれまで主観的評価の信頼性の向上に資するべく入学者選抜方法の調査・研究を行ってきた（吉村,2007；吉村,2009；木村・吉村,2009）。また，吉村・南部（2008）では，AO 入試による入学者の追跡調査を行い，テスト理論に基づき主観的評価の信頼性の観点から入学者選抜方法の改善のあり方についての指針を示した。

本稿では，長崎大学 X 学部及び Y 学部の 2002 年から 2009 年までの志願データ，入学試験データ，学務データの分析を行い，その結果にみられる現行の入学者選抜方法の特徴を報告するとともに，その理由を学習意欲の面から考察した。

2 入試区分による 1 年次学業成績の比較

図 1-1ー図 1-6 はそれぞれ，X 学部の 2002 年，2004 年，2005 年，2006 年，2007 年，2008 年度入学者の 1 年次の全学教育科目の GPA を入学入試区分で比較したものである。2002 年度入試以降，X 学部では，「一般選抜前期後期，課す推薦」，「一般選抜前期後期，課す AO」，「一般選抜前期後期，課す推薦，課さない AO」と選抜方法を変更してきた（一般選抜前期後期の募集人員はほとんど変わってない）。

図より，中央値で比較すると一般選抜前期入学者は後期入学者より学業成績がややよいという傾向が見られる。一方で学業成績が振るわない学生は前期入学者の方に多いという傾向も見られる。

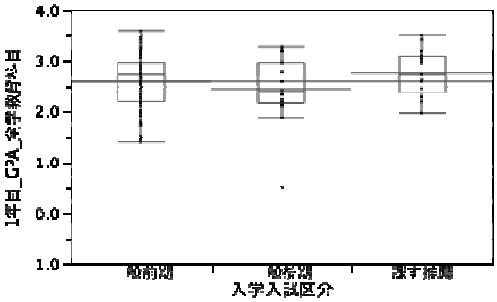

図 1-1　2002 年度入学者

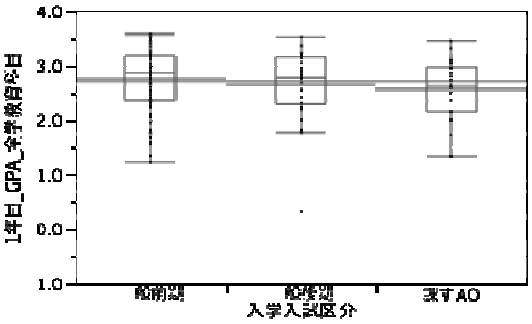

図 1-2　2004 年度入学者

センター試験を課す推薦入試による入学者の学業成績はどの年度も概ねよい。

X 学部では，センター試験を課さない AO 入試を 2005 年に募集人員 4 名で導入し，2008 年度には募集人員を 8 名に増やしている。

図 1-1ー図 1-6 を見ると，2007 年度入学者を除き，センター試験を課さない AO 入試による入学者の学業成績は決して悪くない。

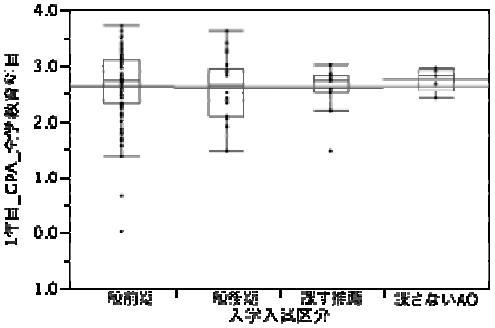

図 1-3　2005 年度入学者

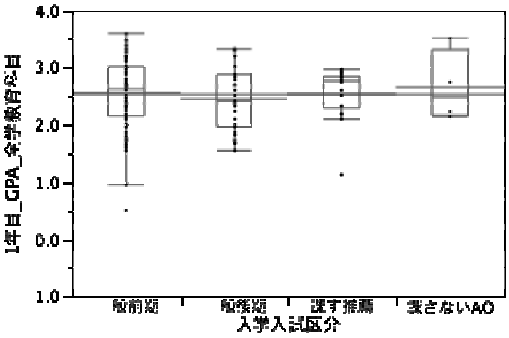

図 1-4　2006 年度入学者

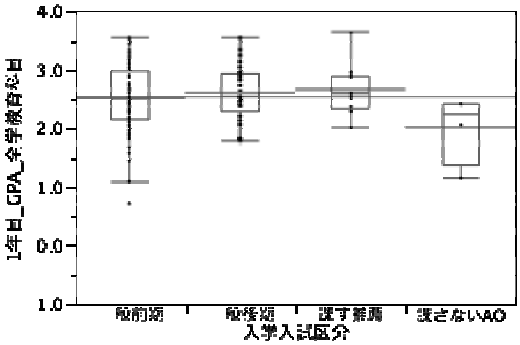

図 1-5　2007 年度入学者

X 学部の「課さない AO」ではセンター試験はもちろん，その他の学力検査を課していない。にもかかわらず入学者がある程度良好な学業成績を収めることができているのは，彼らの目的意識が明確で学習意欲が高いからであると考えられる。

なお，2007 年度入学者の成績が振るわない理由は不明である。2008 年度には定員を増やしているが，入学者の学業成績は概ね良好であることを考慮すると，志願者の母集団がセンター試験回避を目的とした消極的な動機をもつものへと変化したわけでもなさそうである。

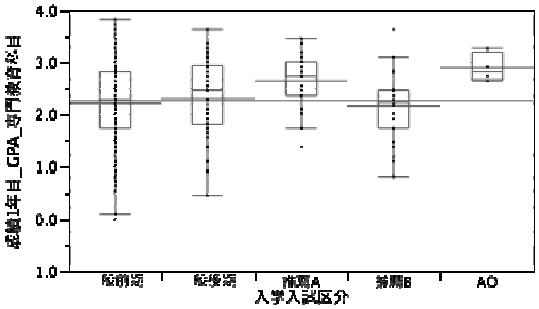

図 2-1　2003 年度入学者

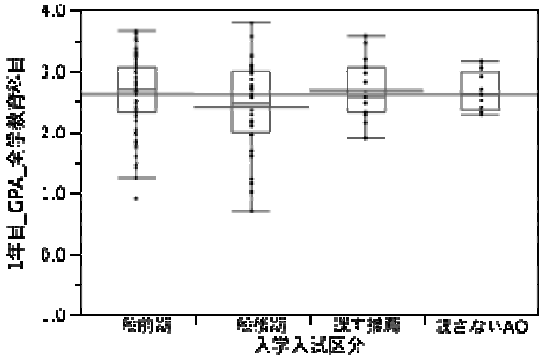

図 1-6　2008 年度入学者

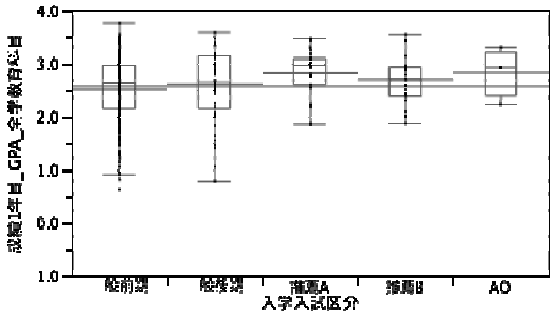

図 2-1　2003 年度入学者

図 2-1～図 2-4 はそれぞれ，Y 学部の 2003 年，2005 年，2007 年，2008 年度入学者の 1 年次の全学教育科目の GPA を入学入試区分で比較したものである。

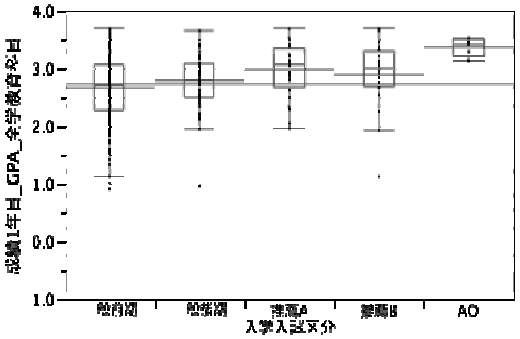

図 2-2　2005 年度入学者

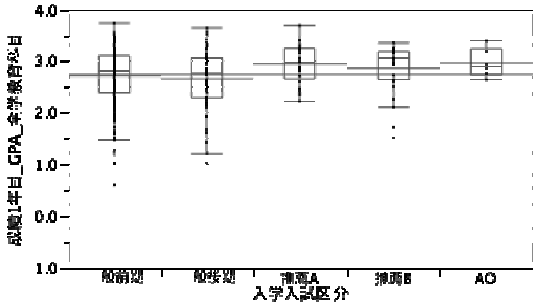

図 2-3　2007 年度入学者

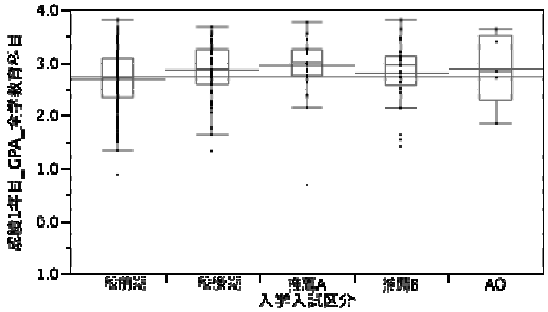

図 2-4　2008 年度入学者

Y 学部では 2003 年度に募集人員 5 名でセンター試験を課さない AO 入試を導入している。図から分かるように AO 入試による入学者の学業成績は概ね良い。

推薦入試 A，B はそれぞれ専門学科，普通科の高校を対象とするもので募集人員は各 25 名である。推薦入試では教科の学力検査は課されない。

図から，推薦入試 A による入学者の成績が良いことが分かる。専門学科の高校カリキュラムは一般選抜による受験に対応していない。そういった意味では学力が不足した状態で入学していると言える。しかし大学入学後の学業成績は決して悪くはない，むしろ良好である。

最近，学力検査を課さない入学者選抜への批判や反省が目立つが，当該分野の学習意欲が高い学生を選抜する仕組みは何らかの形で残しておいた方が良いと思われる。

いずれにせよ募集人員が少ないので単年度の結果で議論するのは好ましくない。中長期の傾向をみてその良し悪しを判断した方がよいだろう。

「競争率が低いと学力不足でも入学ができるので学力による選抜が成立しない」と言われることが多い。Y 学部では一般選抜前期後期とも競争率は約 2 倍と高いとは言えない。そのため，例えば図 2-1ー2-4 を見て，「一般選抜前期日程に成績不良者が多くいるのは競争率が低いからである」などと説明されがちである。しかし，学力検査を課さない入試区分による入学者の成績が必ずしも悪くはないことは上で見た通りである。

大学での学業の成否には学力の高低もさることながら学習態度や意欲の高低も強く影響すると考えられる。現行の分離分割方式では，大学入試センター試験の成績によって受験校を決めざるを得ない。目的意識や学習意欲の高低は二の次となりがちである。一般選抜による入学者の学業成績のレンジが大きいことはその現れかもしれない。入学者選抜方式のあり方の検討には目的意識や学習意欲を重視する観点が今以上に必要と思われる。

3 標準修業年限時での在籍状況の入試区分による比較

入学後の学業成績の他に標準修業年限時の在籍状況（留年，退学等）も入学者選抜を評価する指標の一つとなる。

表 1，表 2 はそれぞれ X 学部，Y 学部における 2002 年度～2005 年度入学者の標準修業年限終了時点での在籍状況である。

推薦入試，AO 入試による入学者の卒業率が一般選抜による入学者のそれよりも概ね高いことが，X 学部，Y 学部に共通する特徴として指摘できる。この結果もまた，大学における学業の成否には目的意識や学習意欲が強く影響することを表すものであると解釈できる。

表 1　X 学部における標準修業年限終了時の在籍状況

入学年度	在籍状況	一般前期	一般後期	課す推薦	課す AO	課さない AO	全体
2002	卒業	91.0%	66.7%	94.4%	—	—	87.5%
	在学	4.5%	19.0%	5.6%	—	—	7.0%
	休学	2.2%	14.3%	0.0%	—	—	3.9%
	退学・除籍	2.2%	0.0%	0.0%	—	—	1.6%
2003	卒業	80.7%	86.7%	—	93.8%	—	84.2%
	在学	12.5%	10.0%	—	0.0%	—	10.5%
	休学	0.0%	3.3%	—	6.3%	—	1.5%
	退学・除籍	6.8%	0.0%	—	0.0%	—	3.8%
2004	卒業	86.2%	85.7%	—	70.0%	—	83.7%
	在学	10.3%	7.1%	—	25.0%	—	11.9%
	休学	0.0%	7.1%	—	5.0%	—	2.2%
	退学・除籍	3.4%	0.0%	—	0.0%	—	2.2%
2005	卒業	84.4%	80.0%	86.7%	—	100.0%	84.4%
	在学	11.1%	12.0%	13.3%	—	0.0%	11.1%
	休学	4.4%	8.0%	0.0%	—	0.0%	4.4%
	退学・除籍	0.0%	0.0%	0.0%	—	0.0%	0.0%

表 2　Y 学部における標準修業年限終了時の在籍状況

入学年度	在籍状況	一般前期	一般後期	課さない推薦	課さない AO	全体
2002	卒業	82.4%	83.9%	90.6%	—	83.8%
	在学	14.1%	14.3%	9.4%	—	13.4%
	休学	0.8%	0.0%	0.0%	—	0.5%
	退学・除籍	2.7%	1.8%	0.0%	—	2.2%
2003	卒業	82.3%	76.3%	84.6%	60.0%	81.3%
	在学	12.5%	18.6%	13.5%	20.0%	13.7%
	休学	1.6%	5.1%	1.9%	0.0%	2.2%
	退学・除籍	3.6%	0.0%	0.0%	20.0%	2.7%
2004	卒業	81.0%	83.6%	88.2%	100.0%	82.7%
	在学	15.0%	8.2%	9.8%	0.0%	13.0%
	休学	1.2%	3.3%	0.0%	0.0%	1.4%
	退学・除籍	2.8%	4.9%	2.0%	0.0%	3.0%
2005	卒業	83.6%	74.6%	90.0%	100.0%	83.2%
	在学	10.9%	19.0%	6.0%	0.0%	11.5%
	休学	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%
	退学・除籍	3.5%	6.3%	4.0%	0.0%	4.0%

4 入学者の出願パターンによる比較

長崎大学の入学者選抜には，センター試験を課す AO 入試，課さない AO 入試，センター試験を課す推薦入試，課さない推薦入試，一般選抜前期試験，後期試験，社会人特別選抜がある（出願者が一部に限定される帰国子女特別選抜，私費外国人留学生特別選抜は除く）。入学者はこれらのいずれかによって選抜されるが，実際に出願している入試区分は一つとは限らない。一般前期での合格者もさらに詳しく見れば，後期も出願しているもの，後期は長崎大学の他学部に出願しているもの，それ以外のものなど様々であろう。

上では入学した入試区分による比較を行ったが，ここではどの入試区分に出願したかによる比較を試みる。このことにより入学の意思の強さと入学後の成績との関連がより明確になると考えた。

図 3-1～3-3，図 4-1～4-3 はそれぞれ X 学部，Y 学部における 2006 年度，2007 年度，2008 年度入学者の 1 年次全学教育科目 GPA を出願パターンで比較したものである。図中 4 桁の数値はそれぞれ左から AO，推薦，前期，後期への出願の有無をそれぞれ 1,0 で表したものである。例えば，0001 は一般選抜後期日程のみの出願を表す。ここでのポイントは，一般選抜の出願が前期あるいは後期のみか，前期後期の両方ともかという点である。

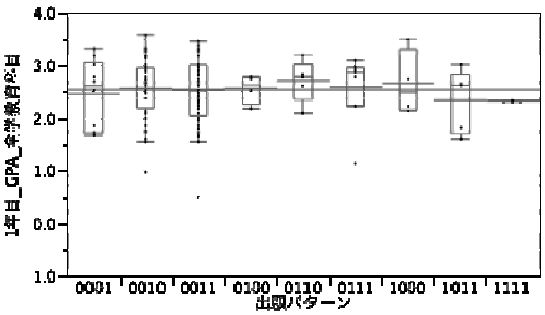

図 3-1　2006 年度入学者（X 学部）

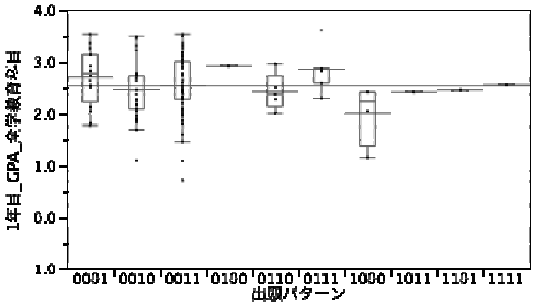

図 3-2　2007 年度入学者（X 学部）

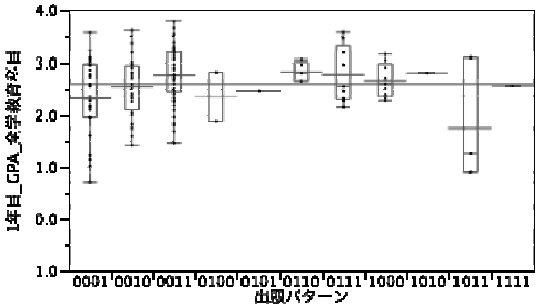

図 3-3　2008 年度入学者（X 学部）

それぞれの学部について連続する 3 年度を観察してみると，前期だけの出願者よりも前期後期とも出願しているものの方が，学業成績が良い傾向にあることが分かる。前期，後期とも同じ大学に同じ学部に出願するということは，その大学学部への入学を強く希望することの現れだと考えると，この結果は入学後の学業成績に入学の意思の強さが影響することを示すものであると言えよう。

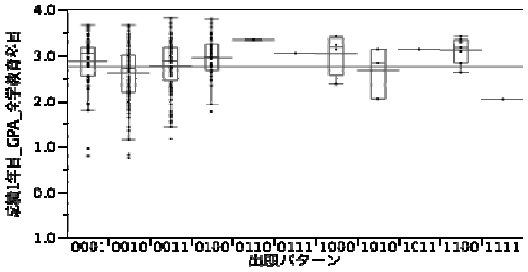

図 4-1　2006 年度入学者（Y 学部）

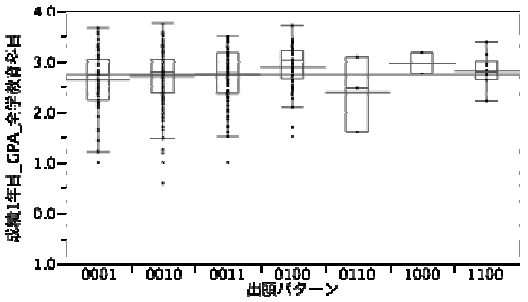

図 4-2　2007 年度入学者（Y 学部）

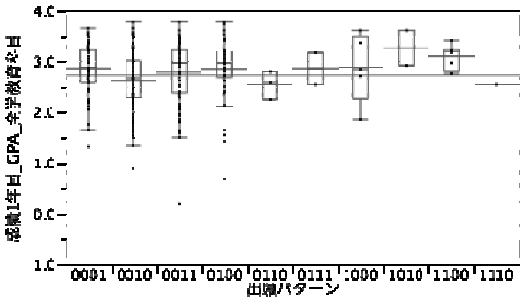

図 4-3　2008 年度入学者（Y 学部）

後期日程による入学者には不本意入学が含まれる割合が多く，学業成績もあまりよくない，と一般に言われることが多い。ところが，図を見てみると，後期のみの出願者の学業成績が極端に悪いということはない。年度によるばらつきはあるものの，むしろ前期のみの出願者の方が集団として学業成績が振るわないように見える。

一般に，前期日程で出願した大学・学部が第 1 志望と解釈されるが，受験者の立場で考えると必ずしもそうとは言えない。前期日程といえども入りたい大学・学部ではなく，大学入試センター試験の成績を見て，合格可能な大学・学部（入れる大学・学部）を選択することになるからである。

一方で，少数ではあるが「1111」という AO，推薦，前期，後期すべての試験区分に出願しているものが存在する。しかし彼らの入学後の学業成績は決して良くはない。確かに入学したいという意思は強く感じるが，一般選抜だけでは合格する自信がないとも受け取れる。学力がやや不足しているのかも知れない。

5 おわりに

大学入学後の学業成績，標準修業年限での在籍状況（出口での評価），を入試区分並びに入試出願パターンで比較したところ，入学後の学業の成否には，入学する意思の強さや，目的意識や学習意欲が高さが関わるであろうことが推察された。

AO 入試など学力検査を課さない入試の急速な広まったことの反動からと思われるが，最近，再び入学者選抜における学力検査の重要性が指摘されている。このことに異論はないが，目的意識や学習意欲も大学入学後の学業の成否を左右する大きな要因となることも忘れてはならない。

現状の一般選抜では，大学入試センター試験の成績によって，受験できる（合格可能な）大学がほぼ決定する。高等学校卒業までの教育によって生徒の目的意識や学習意欲が伸長されたとしても，この仕組みの元ではそれは十分に生かされない。この点を改善するような入学者選抜方法の工夫が必要だと考える。

参考文献

吉村宰（2007）長崎大学 AO 入試における書類選考データの分析−選抜への寄与と評価の信頼性の観点から−，大学入試研究ジャーナル, No.17, 39-42.

吉村宰・南部広孝（2008）AO 入試による入学者の入学後成績と選抜方法−選抜方法改善の観点から−，大学入試研究ジャーナル, No.18, 187-192.

吉村宰（2009）自己推薦書のテキストマイニング，大学入試研究ジャーナル，No.19. 157-160.

木村拓也・吉村宰（2009）AO 入試における信頼性評価—多変量一般化可能性理論を用いた検討—，全国大学入学者選抜研究連絡協議会第 4 回大会研究発表予稿集，71−76.